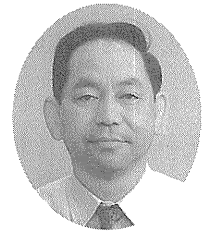


ずいそう

## 時との出会い

黒田 清和



昨年の秋、勤続30周年を記念して、妻とイタリアの古都訪問の旅に出かけた。急ぎの旅は疲れるというので、娘に勧められて自由行動の多いゆったりとした熟年向けのツアーに参加した。

幸いこの年は平日4日間休みをとると10日間の連休にできるカレンダーであり、この旅が実現した。職場の皆さんの協力（強制？）もあり、スケジュールを何とか確保できた。10月は、イタリアの空が一番美しい月だと聞いた。快晴の朝、期待を胸に我々は関空を後にした。

パリ経由で13時間余りの空の旅をして、ミラノに到着した。妻は遠い海外旅行の経験が無く、おまけに大の飛行機嫌いである。正直なところ、この長旅はどうなることかと心配していた。しかし、それは全くの杞憂だった。妻は大空の飛行を楽しみ（時差ぼけもせず！）、到着するやいなや、言葉の壁など意にかいせず、相当な旅のベテランのごとくどこへでも意気揚々と出かけていった。

クリスチャンである彼女の目的は教会巡りだ。事前の調べもよくしていたようだが、やはりそこは遠い旅の空、迷うこともある。どうするかみていると、目ざとく男前の警官を見つけては、果敢にアタックを開始する。そして会話を楽しんで、目的地に辿り着くのだ。道を教えるのは彼等の義務だしイタリア人は女性に親切だし、どうせなら男前の方がいいじゃないとニコニコしている。何というたくましさ。やっぱり女は度胸だ。いやはや…。

せっかくの休暇である。私はワインを楽しみ、イタリアの食事を楽しみ、時を楽しんだ。

水上の蜃気楼、ヴェニス。ルネッサンスの古都、フィレンツェ。そして偉大なローマ。イタリアを選んだのは、妻のヴァチカン訪問の夢を叶えてやりたかったからである。やっと、その夢が叶う時がきた。さすがに大きい。初めて訪れる者に、ただただ、驚きと沈黙をもたらす。世界中から人が集まってくるのだろう。その熱気は、また特別だ。

翌日、妻がヴァチカンの早朝のミサに出かけるとい

うので、付き添った。まだ暗い中、タクシーで現地に向かった。暁に浮かび上がる巨大な宮殿のシルエットは、まぎれもなくカトリックの中枢である。しかし、ここからが大変なことになった。広すぎて、早朝の入り口がわからない!!!

やはり同じように迷っていたフィリピン人の親娘と道ずれになるが、ますます迷うばかり。ミサの時間は迫り、困り果てていると威勢のよいアメリカ人のおじさんに出会った。そういうわけで、みんなで、会話？しながら一緒に捜した。やっと入ることができたのだが、ここからがまた大変なのだ!!!

広いヴァチカンの中では、いたるところでミサが捧げられる。目的の地下聖堂を捜すのも、また一苦労なのである。ようやく探し当て、時間ぎりぎりに、あのアメリカ人と一緒に、イギリス人の団体と無事ミサに加わることができた。

妻はほっとしたのだろう、祈りながら涙を流している。まにあってよかった。私はクリスチャンではないが、流れのままに参画する。旅は道ずれといわれるが、国境を越えて平和で静かな時間が流れた。外に出ると、秋の透き通った青空が目まぶしい。ヴァチカンの上に広がるイタリアの空は、あくまでも青く大きく忘れがたい。

仕事一筋に30年が過ぎた。長い単身赴任もあり、家庭のことは妻にまかせっきりで、済まないことをして過ごしてきた。今日、互いに元気でここに来られたことが無償に嬉しかった。またいつか妻とここを訪れたいと、柄にも無く神に祈る。

旅の終わりはローマの夜だ。10日間の旅を共にしたツアーの皆さんと飲み、食べ、かつ語りにぎやかに過ごした。人との出会い、街との出会い、時との出会いが心温かな思い出となって、しばしの休息の内に旅は終わった。

——くるた きよかず コベルコ建機株式会社取締役常務執行役員  
開発生産本部長——